

東北大学・福島大学生による福島復興まちづくりワークショップを主催しました (2025/8/25～29)

テーマ：福島復興まちづくり、双葉町、交流人口の増加、にぎわいの推進、政策立案

会場：福島県双葉町のFUTAHOME、双葉町産業交流センターほか

大学生が福島の復興まちづくりを考えるワークショップを、東北大学災害科学国際研究所と福島大学行政政策学類が主催し、双葉町の「FUTAHOME（ふたほめ）」にある両大学の「福島浜通り地域における復興・再生まちづくり研究現地研究スペース」を拠点に、2025年8月25日～29日に開催しました。当研究所からは、御手洗潤特任教授（空間デザイン戦略研究分野）のほか、苅谷智大（空間デザイン戦略研究分野）、マリ・エリザベス（国際研究推進オフィス）、今野公美子（広報室）が参画し、コーディネートや大学生への助言などを行いました。

双葉町は、東日本大震災の原発事故に伴って町全域に避難指示が出され、震災から11年後の2022年ようやく住民の帰還が始まりました。震災当時の人口は7千人を超えていましたが、現在の町内居住者は約200人です。

ワークショップのテーマは、①双葉町の関係・交流人口の増加やにぎわいの推進に向けた自治体等の政策を立案する、②大学生が実践できる取り組みを考える、ことでした。

参加した学生は、東北大学・福島大学の学部生・大学院生14人。4泊5日の日程で、福島第一原発の見学のほか、双葉町役場職員や双葉町住民、まちづくり関係者などから話を聞き、双葉のまちを歩き、班ごとにグループワークを重ねて、政策を練り上げました。

最終日の29日、大学生の考えた政策の発表会が双葉町産業交流センターで行われました。

1班は、復興のためには「ハード」「ソフト」の整備のほか「イメージ」の回復が必要と考え、震災前・現在・未来の写真や絵をさまざまなスポットに掲示する「フタバまちなかアーカイブ」を提言しました。「学びの観光」に訪れる人を増やす施策であると同時に、町内の小中学生や町民にコンテンツ制作に携わってもらうことで、町への愛着を深めてもらおうという計画です。

2班は、ソーシャルビジネスに野心を抱く大学生を対象に、町で起業する若者を生み出す「ふたばルーキー育成プログラム」を提言しました。双葉町を住民と共に盛り上げる若者がいることが、町のにぎわいに繋がるという考えです。若者にとっては、ほぼゼロからまちづくりに関わることができるため大きなチャンスであり、「誰かに応援され、まちの成長を実感しながら」社会貢献できることが魅力だと考えたといいます。

3班は、学びをコンセプトにした町内の自転車ツアーと、芸術を生かしたまちづくりを提言しました。双葉町伝統のだるまを活用したアートイベント、映画のロケ地の誘致などを通して、アートの街として認知度を高める提案です。「双葉でしかできないこと」をキーワードに震災復興という「物語性」があることが強みだと発表しました。

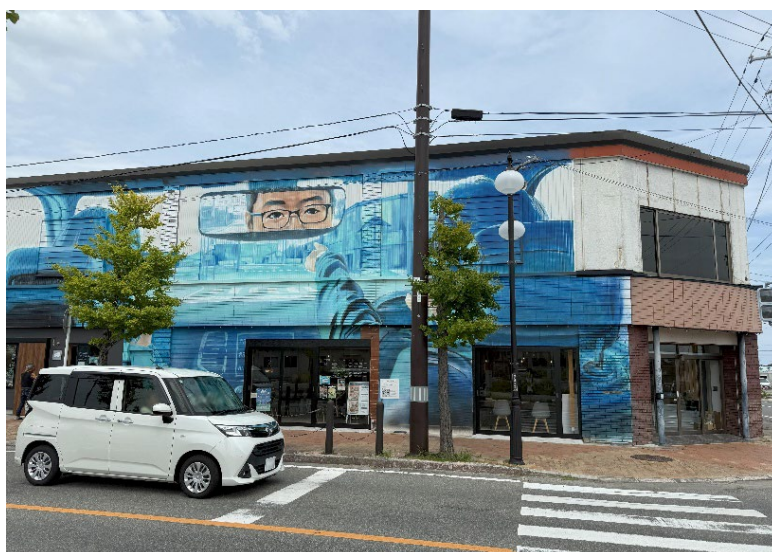
本ワークショップは、福島国際研究教育機構（F-REI）から委託を受けた「福島浜通り地域における復興・再生まちづくり研究」の一部として実施しました。



提言を発表する大学生＝8月29日、双葉町産業交流センター



発表会に参加した学生、教員、双葉町の関係者ら



FUTAHOME（福島浜通り地域における復興・再生まちづくり研究現地研究スペース）のある建物。JR 双葉駅前にあります